

# 心のいただきにさらされて

——リルケの後期詩の一つをめぐって——

小松崎 直

Ausgesetzt auf den Bergen des Herzens. Siehe, wie  
klein dort

siehe: die letzte Ortschaft der Worte, und höher,  
aber wie klein auch, noch ein letztes  
Gefühl von Gefühl. Erkenntst du's?

Ausgesetzt auf den Bergen des Herzens. Steingrund  
unter den Händen. Hier blüht wohl  
einiges auf; aus stummem Absturz  
blüht ein unwissendes Kraut singend hervor.

Aber des Wissende? Ach, der zu wissen begann  
und schweigt nun, ausgesetzt auf den Bergen des

Herzens.

Da geht wohl, heilen Bewußtseins,  
manches umher, manches gesicherte Bergtief,  
wechselt und weilt. Und der große geborgene Vogel  
kreist um der Gipfel reine Verweigerung.——Aber  
ungeborgen, hier auf den Bergen des Herzens....

心のいただきにさらされて。見よ、なんと小さくあそ  
びだす

見よ、言葉の最後の村落が、そして少し高く、しかし  
また何と小さく、更に感情の

最後の農園が。あれが見えるか

心のいただきにさらされて。双手の下の  
岩地。ここにもおそろしくくつかの

花は咲こう、無言の絶壁から

無意識の草花は歌いながら咲き出そう。

しかし知る者は ああ、知りはじめ

そしていま沈黙する者は、心のいただきにさらされ

「

そこにはおそろく、すこやかな意識で、

歩きまわるものがあるう、やすらかな山のけものたち

が、

つぎつぎにあらわれる。そして大きなまもられた鳥

が」

純粹拒否のいただきをめぐる。—— しかしまもられ

ずに、この心のいただきに……

この詩は一九一四年九月二〇日にミュンヘン近郊のイ  
ルシエンハウゼンで成立した。詩のイメージは極めて明白  
だが、この詩の解釈に際して周辺の詩を無視することはで  
きない。しばしば引用される詩「転向(Wendung)」は、ちよ

うど三ヵ月前の六月二〇日にパリで書かれ、その日のうち  
にルー・ブンドレブヌ・ザロメに送られている。

Lange errang ers im Anschaun.

Sterne bracken ins Knie

unter dem ringenden Aufblick.

Oder er anschaute knieend,

und seines Instands Duft

machte ein Göttliches müd,

daß es ihm lächelte schlafend.

.....

Schauend wie lang?

Seit wie lange schon innig entbehrend,

fehrend im Grunde des Blicks?

.....

da beriets in der Luft,

unfaßbar beriet es

tiber sein fühlbares Herz,

tiber sein durch den schmerzhaft verschüttelten

Körper

dennoch fühlbares Herz

beriet es und richtete :

daß es der Liebe nicht habe.

(Und verwehte ihm weitere Weihen.)

Denn des Anschauens, siehe, ist eine Grenze.

Und die geschautere Welt

will in der Liebe gedeihn.

Werk des Gesichtes ist getan,

tue nun Herz-Werk

an den Bildern in dir, jenen gefangenen ; denn du

überwältigtest sie : aber nun kennst du sie nicht.

.....

長いこと彼は見ることでそれを捉えていた。

星々は膝を折った

彼の闘いいどむ眼差を受けて

或いは彼が膝を折って見つめていたのだ

するとその切実なる息吹きに

至高のものも疲れ果て

眠ったまま彼に微笑みかけた。

.....

どれ位見つめていただろう

もういつからだろう 心に欠乏を感じ

眼差の奥底で祈るようになったのは

.....

すると話がなされた 空中で

不可思議に話がなされた

彼の感じられる心について

彼の苦惱で埋めつくされた肉体を通しても

なお感じられる心について

話がなされ、裁きが行なわれた

その心には愛がない と

(そして、それ以上彼に身を捧げることが拒んだ)

なぜなら見ることは 見よ 限界があるからだ」

そして見られた世界は  
愛の中で栄えたいと願うからだ

もはや眼の仕事はなされた

いまや心の仕事をや

お前の中の姿によって ああ捕われたものの姿によつて  
なぜなら」

お前はそれらを捕えながらも 知ってはいないからだ」

かなり長くまた任意に引用を行なったが、ここで明らかに見てとれることは、詩人自身の例え『新詩集』(一九〇七/〇八)などに於ける詩作態度に対する不満とそれに代わるべき新しい創作の姿勢の表明である。つまり転向の表明であり、この転向こそは詩人にとって「生きなければならぬ」として、どうしても現われなければならないものであった訳である。では何への転向か。詩の中に「いまや心の仕事をや」とある。勿論この表現がそのままそれまでのリルケの仕事の眼のみによるものと言っている訳ではなかるうが、ここで詩人が一歩内面化への道を意識的に

歩みはじめたとは言えるだろう。表現を変えればより本来的な自己に目覚めはじめたと言えるだろうし、この辺りにいわゆる実存主義哲学者のこの詩人に対する関心をそそる点があるのだろう。しかしながらここで我々が注意すべきはこのような詩人の自覚があくまでも詩人としての内省から生まれたものである点で、このことは同年の七月初旬の詩「嘆き(Klage)」からも明らかである。

Wenn willst du klagen, Herz? Immer gemiedener  
ringt sich dein Weg durch die unbegreiflichen  
Menschen. Mehr noch vergebens vielleicht.

誰に向ってお前は嘆こうとするのか、心よ、ますます  
人に避けられながら」

お前の道は理解出来ない人々の間をものがきつつ進む  
だがそれもおそらくは空しいのだ

ここでの問題が人間一般ではなく、詩作をする人間、詩人  
にとつてのものであることは明白であろう。

以上二つの詩の部分的な引用によって我々の詩の解釈さ  
るべき方向についての示唆は与えられたように思われる。

つまり詩人にとっての仕事が今や内面化への道をたどりつづつあったということ、さらにそれをもちたらしめたものがあくまでも詩人としての自覚であるということである。詩の内容に立ち入ろう。人間存在が全く何物にもまもられていないことがここでは住む人としてない山中にさらされているというはつきりしたイメージのうちに捕えられている。そしてこの荒涼たる風景にさらされた人間の感情が問題なのである。如何なる逃げ場所をも有さずに、敵しい自然と相対せねばならず、彼には村落や農家ははるか背後に在り、彼は真に只一人なのである。

確かにこのような場所でもいくつかの生は可能であろうが、それは人間のそれとは異なるものだろう。ここにも一本の無意識の草花は咲く。この花は意識をもたぬが故に危険にはさらされていない。また多くの確かな山の獣や大きな憂いを知らぬ鳥が徘徊するが、これらの動物達もまた自らによくなじんだ世界、本能と行動のすべてをつくして定住している世界に確実に暮らしている。動物達は本能のもつ確かさを有しているのに人間はまもられていないということ、自らの世界に定住できないということ、世界がよそよそしく対立的に立ち現われるということなどの点で他の

生物とは際出た対照を示すのである。かくして動物一般はリルケにとって人間の対立像となるのである。それは単に詩人がこの対立によって人間の特殊な本質を際出たせているという意味に於いてのみならず、同時にまた一層深く動物達がおのれ自身のうちに落着いていられるというたしかさという点でも人間にとって理想像であり、その可能性を彼は追求するのである。この動物達のもつ確かさはここでは只背景として用いられているにすぎないが、人間の確かさはそれだけ明瞭に浮かび上がるのである。

ここで考えねばならぬことは、これらのイメージは比喩的に用いられているのであり、それによって別のもの、つまり人間のさらには詩人のその内面に対する関係が述べられようとしているのだということである。これらは自然そのままのいただきなのではなく、心のいただきなのである。つまり我々は心情の動きを風景のイメージによって明確にしてゆくリルケ特有の語法に直面するのである。かくして自己の内面がここでは荒涼たる山岳地帯として理解され、その山中で人間は絶望的に、さらされて存在するのである。したがって人間は単純に心と同一視することはできないのであって、心とは、その中に人間が存在し、様々に

振舞い得るものなのであり、人間に無気味に接近し、その特有の事実直面させ、人間を驚愕させ得るものなのである。

次に現われるのが言葉の村落である。人間が家々に立てこもり、それを集合させて村を作ることによって人の住まぬ自然を人の居住可能なものとしたように、今度は言葉が、それを用いることによって人間が自己の内面を居住可能なもの、しかも他人との共存が可能なものにするものとして立ち現われるのである。言葉はいわば自然の始原状態を居住可能な文化圏に変えたのである。言いかたを変えれば、差し当たっては理解不可能な心情の現実を解釈された世界へ算入してしまうことによって理解可能なものにしてしまう手段が言葉なのだということになる。

そして言葉の背後には次に一層小さくなおはなればなれの感情の農家、つまり心情の現実の漠然とした背景とは異なつて一定の形式を備えたものとして現われる個々の感情があるのである。つまり農家が村落、共同居住が可能な集落と対比されているわけだが、言葉は言語上の理解によつて共通性を許すものであるのに対して感情、言葉とならないもの、その中で人間は既に自分自身のみ頼るのであつ

て共同の村落にいるよりも一層さらされているのである。

しかし心の山に人間がさらされているのは単に言葉として造形されたものの外側に於いてだけではなく、さらに言葉にはならないにせよ感情としては形となつてはいるものの外側に於いてもさらされているのである。そして特定の感情そのものとしては既に再び親しいものとなつた感情の外側で人間はこの自らの心情の形とならぬ原野に立つのである。これこそが手の下の岩地なのである。

この点に関して類似した比喩が用いられている第九悲歌が想起さるべきだろう。

Bringt doch der Wanderer auch vom Hange des  
Berggrands nicht eine Hand voll Erde ins Tal, die  
Allen unsägliche, sondern]  
ein erworbenes Wort, reines, den gelben und blaun  
Enzian.  
.....

旅びとが山の端の斜面から谷へ持ってゆくのも  
誰にも言葉では言い得ない一握りの土ではなくて  
ひとつの獲得された純粹な言葉、黄や青の

リンドウではないか。

ここでもまた獲得された言葉と、誰にも言葉では言い難い土についての言及から明らかになるように問題は心の山なのである。そこから旅人は解釈された世界という谷へ戻ってゆくのである。そして旅人が持って帰ったもの、それまで近づき得なかった現存在の危険な限界感情の領域からもち帰ったもの、つまり人間の共通の体験に近づかせたもの、それは指の下で消えてしまい誰にも言葉で説明できない土なのではなくてリンドウの花、この土から貴重な造形として生じて来たリンドウの花、人間の手のとどくところ、に咲くリンドウの花なのである。

別の言葉で繰り返せば、流動的で、そのものとしては形をもたない生の基盤、生を担いまたはぐむ基盤を捕えることはできないし、また他人とそれについて諒解し得るような具体的な形につくり上げることもできないということである。その基盤の上には人は止揚し難い孤独のうちに立っている訳である。しかし形となった言葉のうちに形のない世界からとったものはやがて人間により諒解された世界の構築には寄与するのである。リンドウが真に言葉そのものを意味していたことは第九悲歌のスケッチから一層明らか

になる。ここでは簡明に次の如くに歌われる。

山の端から言葉に現わせない土を谷へなど持ち帰るな。むしろ言葉になるリンドウを、青いリンドウを持ち帰れ。そして家を、窓を。

家、窓という言葉はリンドウを意味するために用いられているのである。

この点で問題は第九悲歌からも生じる。つまり詩的言語の重要性ということで、ここでは天使へ向って語られるのである。

彼（天使）に語るがよい。

つまり語ること、ものをほめたたえることのうち、言葉に現わせぬ現実である土を語られた言葉である黄色や青色のリンドウに変えるがよいということである。

しかし詩のイメージは別の方向をたどる。というのは詩人はこの人の住まぬ場所にも生は成立し得ると続けるからである。

「ここにもおそろしくくつかの

花は咲こう。無言の絶壁から

無意識の草花は歌いながら咲き出そう。

しかし知る者は ああ 知りはじめ

そしていま沈黙する者は、心のいただきにさらされて」

そこにはおそらく、すこやかな意識で、

歩きまわるものがあるう、やすらかな山のけものたちが、

先にこの一節を人間の存在を、動物、植物のそれから浮き出させるのに役立てた。しかし今度は比喩的に考えなくてはならない。つまり心情の内部で人間は動物、植物に対比されるのである。この詩の中では無心の草、やすらかな山のけもの、大きなまもりの中にある鳥といわれているが、リルケに於いてしばしば行なわれている内面風景の意味に於いては心情そのものの内部にある草、山のけもの、鳥なのである。

したがって沈黙の岩壁から歌いながら咲き出る何も知らぬ草の意味するものは、我々が無知で、つまり無意識である限り、心情の生は安全に咲き出し、そこには危険な限界を動く生の沈黙の絶壁から、なかならず詩的言語を造形することに成功するということである。しかし無意識に生きるということは人間の生の持続的な形態ではない。それ故

リルケはそれに疑問を呈するのである。だが知る者は。そしてその答を悲歌的調子の嘆き、ああ のうちに行なうのである。知りはじめた者、現われた意識は人間を沈黙へもたらず。それ故彼は沈黙し花を咲かせることを止めるのである。

また事情は動物達にあっても同様である。植物のあとで何故また動物のイメージなのか。動物達は意識は持っているが人間のそれとは異なってすこやかな意識を持っているのである。しかしまたこの動物達も比喩的な意味で挙げられていることを想起せねばならない。つまり内面的な動物、情動的な動物なのである。したがって動物達は心情生活の一段高い段階、植物に比さるべき純粹に植物的な無意識過程にあるのではなく、意識をもって行動をしているということである。かくして既にある中には一定の思考が存在し行動するのであって、植物の一樣な、恒常的な成長とは異なるのである。すなわち人間の心情の中を動くものとしての思考があるのである。ここにもまたすこやかな意識があるのである。これが人間のうちに思考が思うがままに往来し、人間が思考を自らのものとし、さらにそれを自分の立場から生み出すよう試みるのではなく、思考に自由を



許す情況なのであろう。

心情の鳥と思考とを同一視することは第一悲歌の次の箇所からも首肯されるであろう。つまりリルケが人間が夜という脅迫的な経験をさけて愛の陶酔のうちに逃げこむことを嫌っている個所で、恋人達について次のように言われている。

だが偉大で異常な思想が

お前のなかに出入りして、しばしば夜は泊っていくの  
に」

お前はいったい何処にその恋人をかくまうつもりなのか」

つまり思想とはここでもまた人間がつき合うもの、独立した存在として彼のところへやってくるものなのであり、やすらかな山のけもの徘徊と完全に符合するのである。したがって鳥もまた未だ恣意的な意識によって解体されてはおらず、思想として解されねばならないであろう。

詩はさらに続く。

そして大きなまもられた鳥が

純粹拒否のいただきをめぐる。

リルケにあつては常にそうだが、ここではすべての語が重要である。いただき、内的風景の最高点、思考がそのまわりをめぐるにはいるがその思考を拒絶する絶対なのである。拒絶は純粹である。思考を拒絶することは絶対の本質に属することである。そして只純粹であり続けられるのはそれが拒絶し続ける限りに於いてである。人間の足が頂上で極め得ぬところ、鳥もまた降りることの出来ぬところ、そこに鳥の飛行は周囲をめぐる限り近づくのである。絶対の周囲をめぐることは絶望の表現ではなく、絶対への連関なのである。

永遠に同一の旋回をすることのうちにまもられた思想があるのではないかという疑問に詩は冷酷に開始部に立ち帰りながら続ける。しかしまもられずに、この心のいただきに……我々の意識の初期の発展段階に我々が有していたような思想、今でも恐らく幸福な時には存在するかも知れぬ思想は我々の現存在を規定するものではない。我々はその枠の外へ歩み出てしまった。そして、それ故に我々の内面の無気味な冷酷さに絶望的に相対しているのである。

【トキモノ】

R. M. Rilke : Sämtliche Werke Bd. I. II. Frankfurt a.M.  
1955.

R.M. Rilke, L. Andreas-Salome : Briefwechsel Wiesbaden  
1975.

【文籍】

O. Fr. Bollnow : Rilke Stuttgart 1951.

O. Fr. Bollnow : Existenzphilosophie Stuttgart 1955.

E. Buddenberg : Ausgesetzt auf den Bergen des Hergens  
in "Die deutsche Lyrik Bd. II" Düsseldorf 1962.

E. Buddenberg : Rilke Stuttgart 1954.

H. Schwerte : Ausgesetzt auf den Bergen des Herzens  
in "Wege zum Gedicht" München 1956.

D. Bassermann : Der späte Rilke München 1947.

手塚富雄 : ゲオルゲとリルケの研究 一九五五年。